

〔原 著〕

(特 別 掲 載)

(女子医学研究・第21巻・第2号)
頁 65—66 昭和 25 年 5 月

東京女子醫學専門學校生徒 252 名に就いて 行いたる ABO 式及 MN 式血液型検査成績

東京女子医学専門学校法医学教室(指導 吉成助教授)

佐 竹 列 子
サ タケ レツ コ佐 藤 京 子
サ トウ キョウ コ

(受付 昭和 26 年 3 月 14 日)

第一章 緒 言

血液型は、1901年 Landsteiner により A. B. AB. O. の四型に分類される事が報告され、更に 1927 年 Landsteiner u. Levine により、家兔を人血球で免疫した時、抗 M 及び抗 N 凝集素を生じ、之で人血球を M. N. MN. に分類出来る事が発見された。

この MN 式は、ABO 式に無関係であるため血液型は 12 種類に分類される。

以來我国に於ても、諸氏により研究され、その発表は非常に多い。

私達は昭和 22 年東京女子医学専門学校生徒 252 名に付き、その血液型を検査したので、ここに報告する。

第二章 実験材料及び実験方法

実験材料としては、2 年生 130 名、3 年生 68 名、4 年生 54 名、計 252 名で、血液は耳朶より採り、生理的食塩水で略 1% の血球浮遊液とし、抗血清は東京大学医学部法医学教室から分与されたものを使用した。

検査方法は、抗血清一滴と血球浮遊液一滴とを、連続ホールガラス上に混和し、15~30 分後に室温で肉眼的に凝集の有無を検した。

第三章 実験成績

第一節 ABO 式血液型検査成績

検査成績は第一表に示した如くで、A 型 35.3 2

第 一 表

血液型		学年			
		2 年	3 年	4 年	計
A	実 数	54	15	20	89
	%	41.54	22.06	37.04	35.32
B	実 数	37	20	9	66
	%	28.46	29.41	16.67	26.19
AB	実 数	5	9	8	22
	%	3.85	13.24	14.81	8.73
O	実 数	34	24	17	75
	%	26.51	35.29	31.48	29.76

%、B 型 26.19%、AB 型 8.73%、O 型 29.76%、Hirszfeld 生物化学的人種系数は、1.226。ウエリッシュの算式によると、 $r=5.45$ 、 $p=2.56$ 、 $q=1.97$ 。

第二節 MN 式血液型検査成績

検査成績は第二表に示した如くで、M 型 30.16%、N 型 18.65%、MN 型 51.19%。

ウエリッシュの算式によると、 $s=5.58$ 、 $t=4.41$ 。

第三節 ABO 式血液型に於ける MN の出現頻度

第二表

学年		2年	3年	4年	計
血液型	M	42	21	13	76
	%	32.31	30.88	24.07	30.16
N'	実数	24	10	13	47
	%	18.46	14.71	24.07	18.65
MN	実数	64	37	28	129
	%	49.23	54.41	51.85	51.19

第三表に示した如くである。

第四章 総括並びに結論

東京女子医学専門学校生徒 252 名につき、ABO 式及び MN 式血液型を検査し、次の成績を得た。

(I) 総計 252 名の ABO 式血液型の分布は、O 型 75 名 (29.76%)、A 型 89 名 (35.32%)、B 型 66 名 (26.19%)、AB 型 22 名 (8.73%)、人種系数 1.22。p は 2.56、q は 1.97、r は 5.45。之等は略従來の日本人検査成績に一致する。

(II) 総計 252 名の MN 式血液型の分布は、M 型 76 名 (30.16%)、N 型 47 名 (18.65%)、*

第三表

	AM	AN	AMN	BM	BN	BMN	ABM	ABN	ABMN	OM	ON	OMN
実数	24	14	51	19	5	42	8	5	9	24	21	30
%	9.51	5.55	20.23	7.31	1.98	16.23	3.17	1.98	3.57	9.52	8.33	15.07
各型に対する%	26.85	15.73	57.30	28.78	7.59	63.63	36.36	22.72	40.9	32.0	28.0	40.0

* MN 型 29 名 (51.19%)、s は 5.58、t は 4.41。之等も従來の日本人検査成績に略一致する。

(III) ABO 式血液型に於ける M 及び N の出現頻度は私達の成績では M は AB 及び O 型では約 1/3 を占め、A 及び B では 1/4 強を占めている。又 N は B 型では僅に 7.59% で最も少く、A には 15.73%、AB には 22.72%、O には 28% であつた。MN は A 及び B では 60% 内外、AB 及び O では 40% 内外であつた。M 及び N 凝集原を証明されない血球は一例も見なかつた。

(御懇篤な御指導御校閲を賜はつた吉成助教授に感謝を捧げる。)

文 献

(1) 浅田：法医学。

(2) 浅田：診断と治療 26 卷 12 号 1586。

(3) 越後・日比野・杉下：犯罪学雑誌 8 卷 2 号 172 (昭 9. 3)。

(4) 越後：関西医事 172 号 (昭 9. 3)。

(5) 越後：犯罪学雑誌 8 卷 2 号 136 (昭 9. 3)。

(6) 古畑：犯罪学雑誌 8 卷 4 号 312 (昭 9. 7)。

(7) 橋本：千葉医学会雑誌 11 卷 10 号 1621 (昭 8. 10)。

(8) 林田：東京医学会雑誌 58 卷 2 号 117。

(9) 国房：長崎医学会雑誌 20 卷 1 号 1 (昭 17. 1)

(10) 高原：犯罪学雑誌 8 卷 4 号 320 (昭 9. 8)。

(11) 谷口：長崎医学会雑誌 16 卷 7 号 1879 (昭 13. 7)。

(12) 徳川：日本法医学雑誌 1 卷 2 号 118 (昭 20. 1)